

『私たちの間に住まわれた神』 ヨハネの福音書 1 章 14～18 節

1. 私たちの間に住まわれた神

14 節に、「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。**」とありました。この「**ことば**」は、1 節に「**初めにことばがあった。**」と言われていたその「**ことば**」です。1 節にはさらに、その「**ことば**」は神と共にあり、自らが神であったと語られています。また 3 節には、「**すべてのものは、この方によって造られた。**」とありました。天地万物を創造した神である「**ことば**」、その「**ことば**」とは、イエス・キリストのことです。その「**ことば**」が「**人となって、私たちの間に住まわれた**」と 14 節は語っているのです。この「**人**」と訳されているギリシヤ語は、下の欄外の説明にもあるように、直訳すると「**肉**」です。「**ことば**」が肉体を取って私たちの間に住まわれた。これを書いたヨハネは 1 章 1 節から 5 節までの箇所で、「**この方は永遠の初めから存在し、すべてのものを造られ、いのちの源、人の光であられた**」と言っていますが、そのお方が人となって現われてくださったのです。いったい神はなぜ人となられたのでしょうか。

① 神の栄光

14 節の後半には「**私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。**」とあります。「**ことば**」が肉となって私たちの間に宿って下さったので、私たちはその「**栄光**」を見ることができたのです。「**この方の栄光を見た**」というのは驚くべきことです。人間は神の「**栄光**」を見ることはできない、それを見たら罪ある人間は死んでしまう、と旧約聖書以来語られていました。その神の「**栄光**」を私たちは見ることができたのです。その「**栄光**」を見るなら、この方がどんなに「**恵みとまこと**」に満ちておられるかがわかるでしょう。それはちょうど旧約聖書の時代にイスラエルの民が荒野を旅していた時、「**栄光**」の雲として現れたようにです。この「**住まわれた**」という言葉には「**幕屋を張る**」という意味があって、そのことを表しています。つまり、神があのかの会見の天幕（幕屋）で彼らと共に住まれ「**栄光**」の雲として現れてくださったように、キリストと人となって私たちの間に住んでくださることによって、神の「**栄光**」を見ることができるといことです。キリストは、そのために人となって私たちの間に住んでくださいました。そのことによって神がどんなに「**栄光**」に輝いておられる方であるか、「**恵みとまこと**」に満ちた方であるかを示すためです。この方を信仰の目をもって見る人々には、この神の「**栄光**」を見ることが出来ます。そして、その「**栄光**」は、「**恵みとまこと**」に満ちていました。

② 神の姿

18 節にも「**いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。**」とあります。神ご自身も、その「**栄光**」も、人間が直接見ることはできないのです。しかし、「**父のふところにおられるひとり子の神**」、つまりイエス様が、肉となり、人間としてこの世を生きて下さったことによって、神を示して下さいだったので、このイエス様によって、人間が神を知り、神の姿を見ることができるようになったのです。14 章 9～10 節でイエス様は、「**わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられることを、信じていないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざを行っておられるのです。**」と語りました。イエス様が肉となってこの世に来て下さったことによって、私たちも神を見ることができるようになった、神と共に生きることができるようになったのです。

2. 恵みとまことに満ちた方

「**恵みとまこと**」に満ちておられたとはどういうことでしょうか。この「**恵みとまこと**」という言葉は、旧約聖書で、この二つの言葉が一緒に出てくる箇所を見てみると、これらは、いずれも神との契約において用いられていることがわかります。そしてこれは、神は契約を守ることに於いて真実であられるということを表しているのです。神は、私たち人間に対して救いの約束をしてくださいました。その救いの約束というのは、神が御子をこの世に遣わして私たちが受けなければならない罪のさばきを代わりに受けることによって、私たちを罪から救ってくださるというものでした。

「しかし私たちは今、イエス様をこの目で見ることができない、父なる神と同じようにイエス様も、私たちにとっては目に見えない存在だ、だから私たちは神を見ることも、神の栄光を見ることもやっぱりできない」と思うかもしれませんが、しかしそれは違うのです。私たちは今、この地上で、イエス様とお会いすることができ、イエス様による救いの恵みを感じ取ることができ、イエス様との交わりに生き、イエス様ご自身を味わうことができる場が、私たちには与えられているのです。それは、イエス・キリストの体である教会です。教会において私たちは、肉となって私たちの間に宿られた「**ことば**」であるイエス様とお会いすることができ、父のひとり子としての、「**恵みとまこと**」とに満ちているイエス様の「**栄光**」を見ることができるようなのです。イエス様が人間としてこの地上を生きておられた間だけのことでなく、イエス様の十字架の死と復活、そして昇天の後、**聖霊**が弟子たちに降って地上にキリストの体である教会が誕生した、あのペンテコステの出来事において受け継がれ、その後の教会の歴史において継続されていったのです。肉となってこの世を生きて下さった「**ことば**」であるイエス様は、教会において、その礼拝において、今も私たちの間に宿って下さり、私たちにご自身の「**栄光**」を示し、私たちと共に生きて下さっているのです。この地上にキリストの体である教会が存在していることにはそのような意味があるのです。一つの教会が誕生するごとに、「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。**」という神の救いの御業が、地上において前進していったのです。そしてそれらの教会において、14 節の「**私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。**」という体験が、新たな人々に与えられていったのです。

イエス様は、決してあなたを捨てることはありません。なぜなら、そのように約束してくださったからです。マタイの福音書 28 章 19~20 節に「**ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。**」と約束があるからです。そして、イエス様は約束されたことを必ず果たしてくださいませ。なぜなら、この方は真実な方だからです。パウロは、テモテ第二 2 章 13 節で「**私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。**」と言っています。

私たちもこのような人になりたいと思います。箴言 3 章 3 節には、「**恵みとまことがあなたを捨てないようにせよ。それをあなたの首に結び、心の板に書き記せ。**」とあります。いったいどうしたらこのような人になれるのでしょうか。この方を見てください。この方は「**恵みとまこと**」に満ちておられます。この方は、私たちと同じ人となってくださり、私たちの間に住んでくださいました。だから、この方を見るとき、私たちも「**恵みとまこと**」に満ちた者になることができます。私たちが「**恵みとまこと**」に生きたいと願うなら、キリストの元へ行かなければなりません。それは、イエス・キリストという泉から汲むことによって私たちに及んでくるからです。

ヨハネはこの方について証しして、15 節で「**ヨハネはこの方について証しして、こう叫んだ。『私の後に来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。**」と言いました。なぜなら、自分よりも先におられたからです。どういうことですか？「**私より先におられた**」というのは、この方が永遠の初めからおられたということ、つまり、この方は神のひとり子であるということです。ヨハネは偉大な預言者で、女の中から産まれた者の中で、彼よりも偉大な者はいないと認められていたほどの人物ですが、そのヨハネが、「**私はその方のくつのひもを解く値打ちがない**」と言わしめるほど偉大なお方、それが神のひとり子キリストだったのです。

この方には神の「**栄光**」がありました。この方は「**恵みとまこと**」に満ちておられました。ですから、あなたもこの方の元に行くなら、あなたも「**恵みとまこと**」に満たされることができるのです。

3. 恵みの上にさらに恵みを

私たちは、16 節に語られているように、「**私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。**」ということを味わってきました。キリストは「**恵みとまこと**」に満ちておられる方なので、この方を信じて歩む私たちも、その満ち満ちた豊かさの中から、「**恵みの上にさらに恵み**」を受けることができます。ところで、この「**恵みの上にさらに恵みを受けた**」とはどういうことでしょうか？これは原文では「**恵みの代わりに恵みを受けた**」

となっています。これはどういうことかという、一つの「恵み」を受けたらそれでおしまいということではなく、その代わりにまた新しい「恵み」を受けるということです。ちょうど泉から水がこんこんと湧き出て来るように、神の恵みは尽きることがありません。

しかし、そればかりではありません。私たちの人生には、次々と問題が起こってくるものですが、例えどんなに問題が起こっても、その問題に対する解答としての「恵み」がとめどなく与えられるということでもあります。いや、問題そのもののさえも「恵み」となります。「なぜなら、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すということを知っているからです。」とあるからです。問題さえも「恵み」であればすべてが「恵み」となります。キリストに信頼して歩む人生は、すべてが「恵み」なのです。どうしてそのように言えるのでしょうか。その理由が 17 節にあります。その「恵み」は、17 節に「**律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。**」とあるように、モーセを通して与えられた律法とは違うものです。自分の力で律法を守り、正しい良い行いをすることによって救いを得る、というのではなくて、イエス様を通して現れた「恵みとまこと」によって生かされてきたのです。つまり、神のひとり子であるイエス様が人間となってこの世を生きて下さり、私たちの全ての罪をご自分の身に負って十字架にかかって死んで下さったことによって、神が私たちの罪を赦して下さり、またイエス様の復活によって私たちにも、復活と永遠の命を約束して下さった、それが「恵みとまことはイエス・キリストによって実現した」です。神が、ひとり子の命をすら与えて下さるほどに、罪人である私たちを愛して下さっているという「恵みとまこと」が、イエス様を通して現されたのです。

4. 律法と恵み

「**律法**」とは何でしょうか？律法とは、神の「教え」や「戒め」のことです。内容的には、神に対して私たちが成すべき責任から、私たちがこの社会の中で生きていく上で守らなければならない道徳的、倫理的教えを包んでいます。申命記 7 章 6 節以下によると、イスラエルの民は神の一方的な「恵み」によって諸国民の中から特別に選ばれた神の民なので、この神の命令を守る者なら祝福を与えると約束してくださいました。その代表的な「**律法**」に「**十戒**」と呼ばれるものがあります。もし彼らが神の声に聞き従い、神との契約を守るなら、彼らはあらゆる民族の中であって、神の宝となると約束されました。

出エジプト記 20 章 3～17 節に「**十戒**」にあります。しかし、どうでしょう。どんなに神と約束しても、この命令を守ることでできる人がいるのでしょうか。神の律法は 90 点以上だけではだめなのです。常に 100% でなければなりません。しかし、どうでしょう。私たち人間の中で完全にこれを守ることのできる人などいるのでしょうか。いません。私たち人間は自らの罪と弱さのために神の戒めを完全に守ることはできないのです。自分の力でどんなに頑張ってみても、神が求めておられる基準に達することはできません。「**律法**」は本来良いものであり、神の「恵みとまこと」を受けるための手段として神が与えてくださったものですが、誰も行うことができないのです。

しかし、この「**律法**」とは別に、律法と預言者によって証しされた神の義が示されました。それがイエス・キリストです。キリストはこの「**律法**」を完全に行うことができた方であるというだけでなく、この「**律法**」が本来、指し示していた方でした。このキリストが私たちの罪の身代わりとなって十字架で死んでくださったことによって、この方を信じるすべての人の罪は赦され、神の前に義と認められるようになったのです。これが「恵み」です。

「恵み」とは何ですか？「恵み」とは、受けるに値しない者に対する神の一方的な恩寵です。これはグッドニュース、福音です。エペソ人への手紙 2 章 1～5 節には「**さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中であってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。私たちもみな、不従順の子らの中であって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。**」とあります。私たちは、かつては背き

と罪の中に死んでいた者です。死んでいたわけですから、自分ではもう何もすることができません。しかし、神はそのような者をあわれんでくださり、一方的に救いの御手を差し伸べてくださいました。背きの中に死んでいた者を、キリストとともに生かしてくださったのです。これが「恵み」です。この「恵み」は、イエス・キリストによって実現しました。それは私たちから出たことではなく、神からの賜物なのです。そればかりではありません。この方を信じ、この方に結びつくことによって、「恵みの上にさらに恵み」を受けることができるようになりました。なぜなら、この方の「恵み」は満ち満ちておられるからです。

5. キリストを証しすること

そのことは、教会の礼拝において自動的に起ることではありません。教会はキリストの体ですが、それはそこにおいて、キリストが常に指し示され、キリストこそが主であり教会の頭であられることが証しされていることによって、そこに聖霊なる神が働いて下さってこそ実現するのです。弟子たちが集まっただけで教会が生まれたのではなく、聖霊が降ったことによって教会が誕生したように、聖霊なる神が私たちの内に宿り、働いて下さることによってこそ、キリストの体である教会が築かれるのです。そのことが起るために、私たちは、肉となってこの世を生きて下さったまことの神である主イエスを常に指し示し、証ししていかなければなりません。それをしたのが、15 節に出て来る洗礼者ヨハネでした。15 節に「ヨハネはこの方について証して、こう叫んだ。『私の後に来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。」とあります。ヨハネは、自分の後から来られるイエス様こそが救い主であることを証したのです。教会も、このような証しに徹することによってこそ、キリストの体として歩むことができます。教会はこの世にあって、肉となって人となられたイエス様こそがまことの神であり救い主であられることを証しし、宣べ伝えていく群れです。イエス様を通して現れた「恵みとまこと」によって人々が新しく生かされていくのです。

6. 父のふところにおられるひとり子の神

神は霊ですから私たちの肉眼で見ることはできません。ではどうしたら神を知ることができるのでしょうか。ここでヨハネは、18 節で「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」と言っています。神は私たちの肉眼で見ることはできませんが、そんな私たちでも神を知ることができるように、神はご自身の御子を人としてこの世に送られ、神がどのような方であるのかを私たち人間にはっきりと啓示してくださったのです。

「父のふところにおられるひとり子の神」とは、イエス・キリストが父なる神と不断の親しい交わりを持っておられたということを表しています。父なる神といつも一緒にいて親しく交わっておられたので、父なる神がどのような方がよくわかりました。人間の親子関係と違い、神は完全な交わりを持っておられます。ですから、ひとり子の神が、神を完全に神を説き明かすことができたのです。イエス様の弟子の一人ピリポはイエス様に「主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」(ヨハネ 14:8) と言いました。これは私たちの持っている願いと同じです。それに対して、イエス様は「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。」(ヨハネ 14:9) と言われました。私たちも、神を見ることができたらと思うことがあります。しかしイエス様は、「わたしを見た人は、父を見たのです。」と言われました。キリストを見れば、父なる神を見ることのできるのです。キリストを見るということは神を見るということ、キリストを知るということは神を知るということなのです。

あなたはどれだけ神を知っておられるでしょうか。私たちの信仰生活は、この神をどれだけ深く知っているかにかかっています。ですから、私たちはこのイエス・キリストをよく知らなければなりません。聖書を通してキリストをよく知り、この方との生きた交わりを通して、「恵みとまこと」を豊かに頂き、さらに大きく成長させていただきたいと思います。